

二本木遺跡

—第 32 次発掘調査概要報告—

令和6（2024）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、筑後地方における中心部として発展を遂げてきました。また、それに伴い市内各所に数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、高良山の麓にあたる御井町で実施しました。縄文時代から中世まで、多種多様な時期の遺物や遺構を確認することができました。特に弥生時代の墓域は、久留米における弥生時代像を考える上で、重要な成果となりました。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の方をはじめ、近隣住民の皆様にご多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和6年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例言

1. 本書は宅地造成に先立ち、美里建設株式会社 代表取締役 樽野建夫氏の委託を受けて実施した、二本木遺跡第32次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の長谷川桃子が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、長谷川と熊代昌之、藤木幸子、中村麻衣、松尾朱美が行い、浄書は長谷川、山元博子、横井理絵が行った。
4. 遺構写真は Canon EOS6D Mark II を用いて長谷川が撮影した。
5. 調査区全体の空中写真は、有限会社空中写真企画がドローンを用いて撮影した。
6. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
7. 遺構表記の略記号は、S D…溝、S I…竪穴住居、S K…土坑、S T…墳墓を意味する。
8. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。本調査の略記号は NHG - 32、調査番号は 202215 である。
9. 遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。個別遺構図については水系メッシュ法（1/10）で記録した。
10. 本書の執筆・編集は長谷川が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	9

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。令和4年10月24日、久留米市御井町字旗崎1164番1、1168番4、1168番5における「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である二本木遺跡の範囲内にあたり、同年11月4日の試掘確認調査でも溝や土坑が確認された。宅地造成の計画のうち、切土部分については保護層が確保されるものの、道路部分については発掘調査が必要である旨を回答した。同年12月20日に「発掘調査の依頼」が提出されたため、令和5年1月25日に久留米市長と調査委託者は二本木遺跡第32次調査の委託契約と協定書を取り交わした。

遺構検出後、想定より遺構の密度が高かったことから協議を行い、期間を7日間延長することとなった。調査期間は令和5年2月6日から同年3月31日まで行った。遺物整理と報告書作成は協定書に基づいた委託契約を取り交わし、令和6年3月31日まで行った。調査面積は299㎡である。

2. 調査及び報告書作成にかかる体制

調査委託者：美里建設株式会社 代表取締役 樽野 建夫

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：井上 謙介

調査総括：久留米市 市民文化部 部長：竹村 政高

次長：深堀 尚子（令和4年度）

古賀 裕二（令和5年度）

文化財保護課 課長：水島 秀雄（令和4年度）

井上 英俊（令和5年度）

課長補佐：田中 健二（令和4年度）

甲斐田邦彦（令和5年度）

課長補佐兼主査：白木 守 丸林 禎彦

主査：小澤 太郎

事務主査：江島 伸彦

調査担当：長谷川桃子

整理担当：今村 理恵 宮崎 彩香（令和4年度）

江藤 玲子（令和5年度）

会計年度任用職員（発掘調査）

秋永 絹子、稲益 元之、川原 初美、黒岩 秀則、長野 晃久、永野 高弘、中村 麻衣、
廣田 淳、藤木 幸子、松尾 朱美、松本 金一、丸山 幸、溝口 輝男、渡辺しげ子

会計年度任用職員（整理作業）

江口 里織、野間口靖子、原口 節美

3. 調査の目的と経過

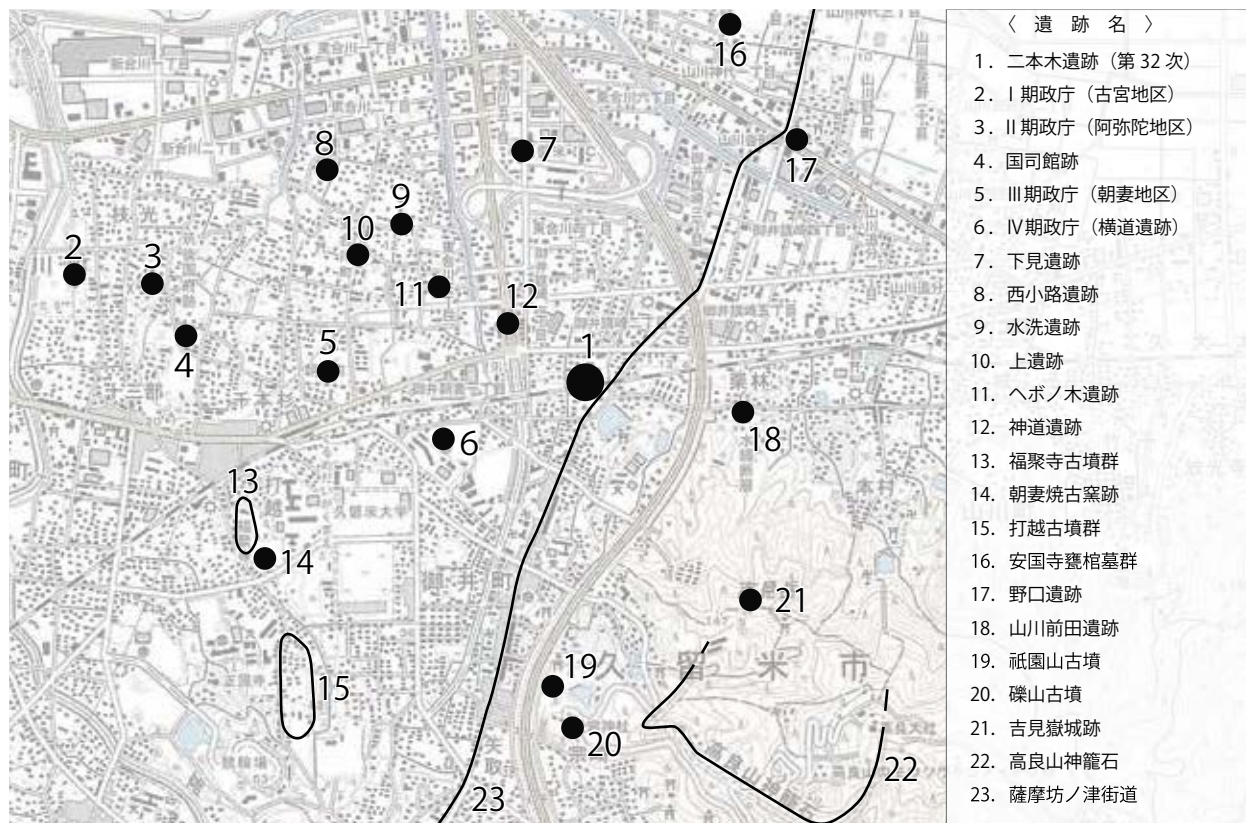
試掘確認調査で検出した遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。令和5年2月6日、機材の搬入を行い、調査を開始した。同月6日から9日まで重機による表土剥ぎを行った。8日から作業員を投入し、その後、順次遺構掘削、測量、写真撮影を実施した。3月8日にST26から人骨が出土したため、出土状況を記録したのち、3月14日に舟橋京子氏（九州大学比較社会文化研究院）が来訪し、人骨を取り上げた。翌15日に全景をドローンで撮影した。同月16日から17日まで重機による埋め戻しと調査区の拡張を行った。29日まで補足の調査を行い、29日から30日にかけて埋め戻した。31日に撤収作業を行い、現地での作業を終了した。

II. 位置と環境

二本木遺跡は、市街地の東部に位置する御井町に所在し、耳納連山の西端に聳える高良山の西へ派生する中位段丘上に広がる。

二本木遺跡周辺における最初の人類の活動痕跡は、縄文時代に遡る。第5次調査において不整形土坑が検出され、中期の船元式系土器が出土している。二本木遺跡の西方に位置する横道遺跡では草創期の細隆起線文土器や、早期の土器・集石炉など、後期を除く時期の遺構・遺物が認められる。

二本木遺跡において、これまで確認されている弥生時代の遺構・遺物は中期に限られる。第3・4・12次調査などでは、幅5m以上の溝が検出され、総延長は120m以上に及ぶ。第15次調査では、



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

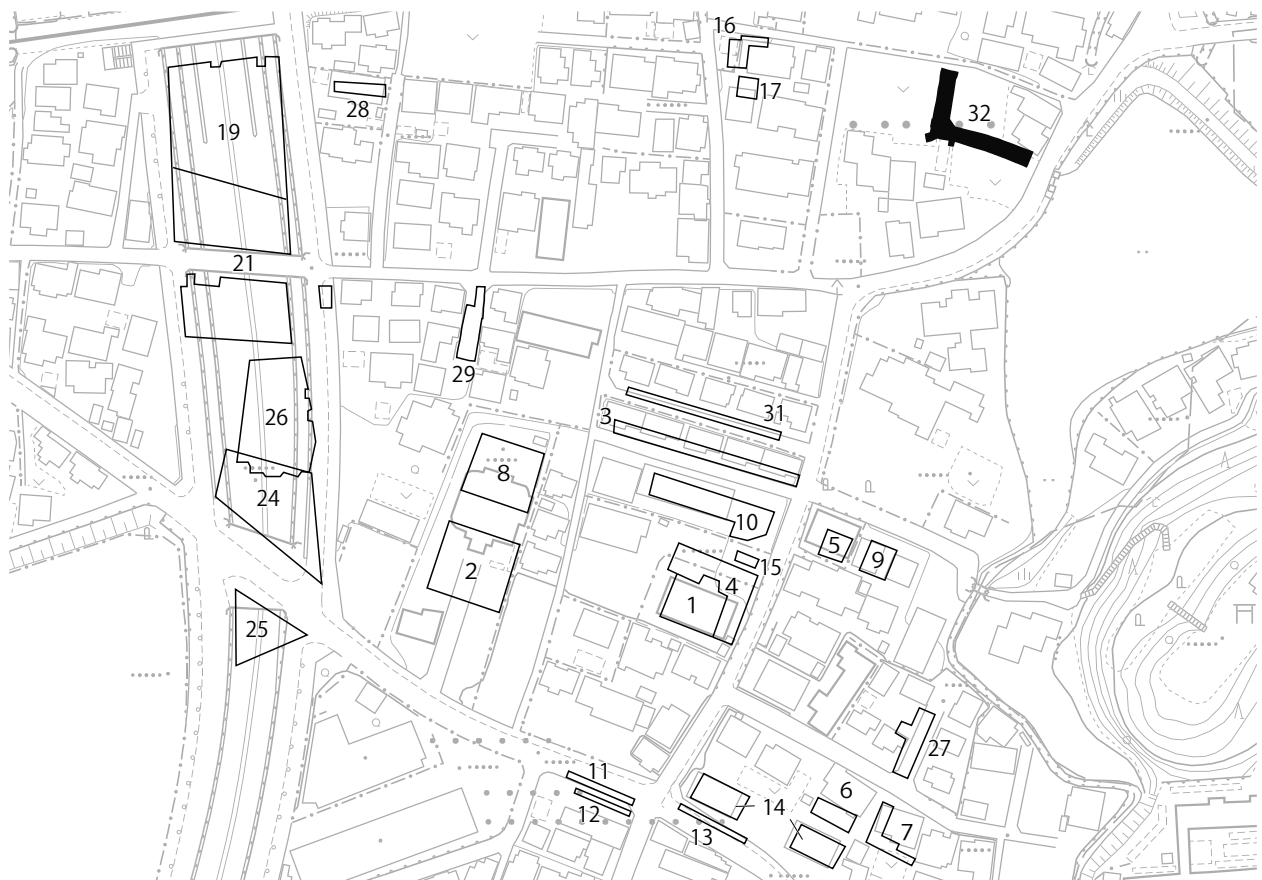
溝底から破砕状態で投棄された丹塗り土器が確認されている。この溝より東側では弥生時代の遺構は皆無であり、西側に竪穴住居や土坑などで構成される集落が展開する。

古墳時代には、南方へ1.6kmの丘陵上に市内最古の祇園山古墳（方墳）が築造される。この他にも福聚寺古墳群に代表されるように、いくつかの古墳群が存在したとみられるが、大半が後世の造成等によって消滅したようである。集落域については確認できていないため、二本木遺跡一帯では空白期と考えられる。

7世紀中頃、高良山に神籠石が築かれた。また、山川前田遺跡や神道遺跡では、天武7年（678）の「筑紫大地震」によって生じた断層や地割れ痕跡も確認されている。8世紀中頃は、筑後国の政庁が古宮地区から阿弥陀地区へと移転する時期にあたる。二本木遺跡では、同時期の竪穴建物や土坑、土壙墓などが確認されている。

平安・鎌倉時代は、二本木遺跡が盛行する時期にあたる。11世紀後半に政庁が朝妻地区から横道地区へ移転する。それに呼応するように周辺一帯に集落が営まれる。11世紀後半から12世紀代の遺構が確認されており、輸入陶磁器をはじめ、大量の土器が消費された。横道地区に移転したIV期政庁は12世紀後半に衰退するが、二本木遺跡の集落は13世紀前半まで継続する。

近世を迎えると、薩摩坊ノ津街道が整備され、この地は「府中宿」として発展した。また、西方へ1kmの福聚寺に南接する朝妻焼古窯跡は、久留米藩により正徳4年（1714）に操業を開始した陶磁器窯であったが、肥前陶磁器との競合に破れ、享保13年（1728）頃に閉窯したようである。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

試掘確認調査の成果から、当初は密度の低い中世遺構の広がりをも想定していた。遺構の検出面まで約 0.9m を測る。

主要遺構としては、縄文時代の竪穴住居、弥生時代の溝、土壙墓、石棺墓、木棺墓、甕棺墓、中世の土坑などを検出した。ここでは主要遺構の一部について概要を述べ、詳細な図面や帰属年代等については、今後予定している正式報告書に掲載する。

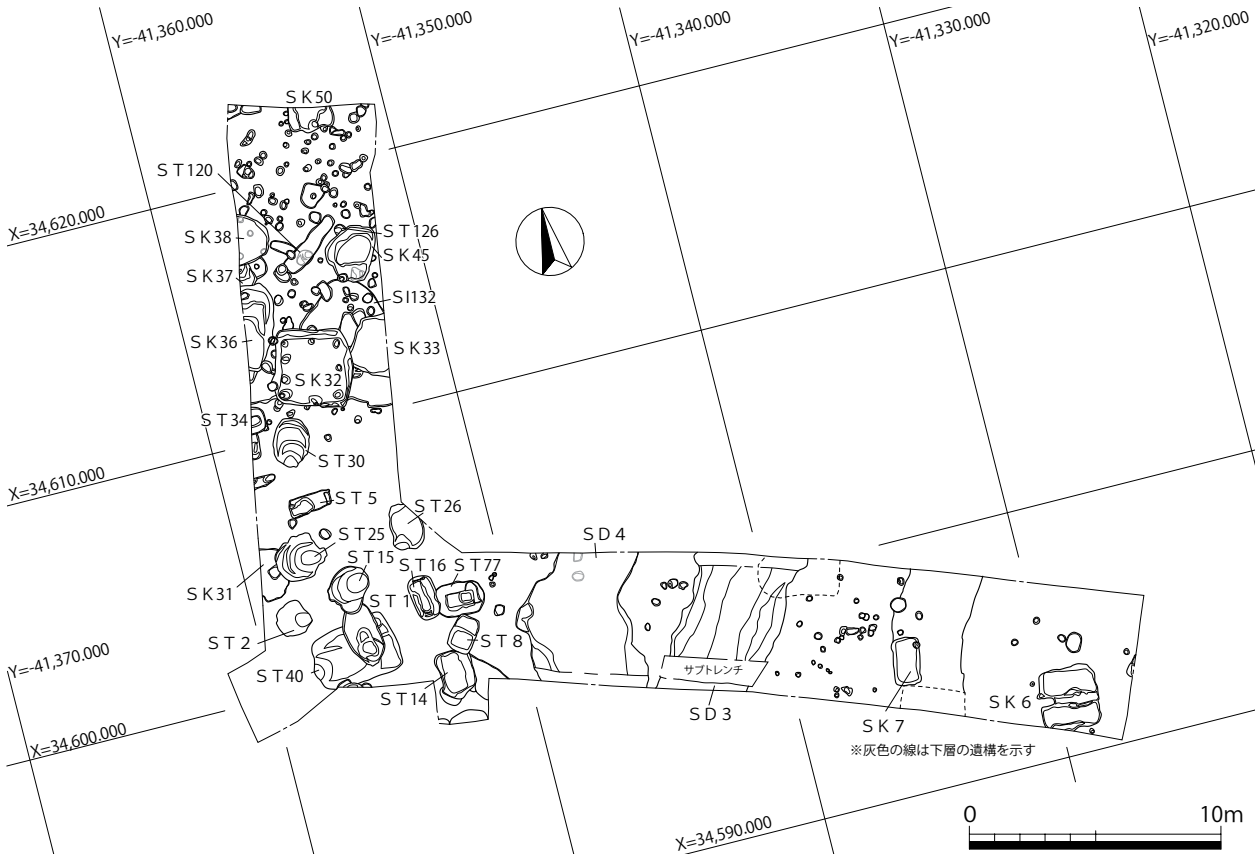
溝

SD 3 (第 5 図)

調査区中央で検出した溝である。幅 3.5 m、深さ 0.7 m であり、断面は U 字形を呈する。チャンネルを利用し掘削した溝であると考えられる。底面以下は暗褐色シルトが続くが、遺物はほとんど含まれていない。縄文土器の鉢、弥生土器の甕・壺・高坏・器台、石包丁、石鏃などが出土した。

SD 4 (第 6 図)

調査区中央で検出した溝である。幅 4.5 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m であり、南へ傾斜する。断面は U 字形を呈する。弥生土器の甕・壺、スクレイパーなどが出土した。



第 3 図 遺構配置図 (1/300)

竪穴住居

S I 132

調査区北部で検出した竪穴住居である。円形を呈する。後世の開発によって削平されたのか、深さが0.1 mと浅い。縄文土器の鉢が出土した。

土坑

S K 6 (第7図)

調査区東端で検出した土坑である。長軸2.4 m、短軸1.7 m、深さ0.5 mを測る。平面形はほぼ正方形である。西側中央から東へ傾斜するが、北側と南側はこの傾斜面よりも深く掘削されているため、西から東へ傾斜した帯状の高まりのようにも見える。土師器の坏・小皿・甕、須恵器の甕、白磁碗・皿、瓦器埴などが出土した。

S K 7 (第8図)

調査区東部で検出した土坑である。平面形は長方形を呈する。長軸1.8 m、短軸1.0 m、深さ0.3 mを測る。底面から完形の土師器の坏が出土したことや平面形が長方形であることから、土壙墓の可能性も考えられた。しかし、土師器の坏・小皿、白磁碗、瓦器埴などといった遺物が大袋2袋分出土しており、土壙墓とするには含まれる遺物が多量であるため、土坑として報告する。

S K 31

調査区中央で検出した土坑であり、西側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形を呈する。長軸2.0 m、短軸1.0 m以上、深さ0.1 mを測る。遺構検出時、S T 25に先行する弥生時代の墳墓と想定していたが、土師器の小皿や青磁碗などが出土しており、中世の土坑であることが判明した。

S K 32 (第9図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形はほぼ正方形を呈する。長軸3.1 m、短軸2.9 m、深さ0.6 mを測る。壁際の床面から規則的に配列されたピットを検出し、何らかの上部構造を伴うものと考えられる。土師器の坏・小皿、須恵器の坏・甕、白磁碗、青磁碗・皿の他に、弥生土器の甕・高坏・器台なども出土した。

S K 33 (第10図)

調査区北部で検出した土坑であり、東側は調査区外へ延びる。平面形はやや正方形を呈する。長軸2.4 m、短軸1.5 m以上、深さ0.4 mを測る。土師器の坏・小皿・甕、須恵器の甕、白磁碗などの他に、弥生土器の甕なども出土した。

S K 36 (第11図)

調査区北部で検出した土坑であり、西側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形を呈する。長軸3.4 m、短軸1.1 m以上、深さ0.7 mを測る。切り合い関係からS K 37に後出する。土師器の坏・小皿・甕、黒色土器A・B類の坏、須恵器の坏、鉄滓の他に弥生土器の甕なども出土した。

S K 37 (第12図)

調査区北部で検出した土坑であり、西側は調査区外へ延びる。平面形は円形を呈する。長軸0.8 m、

短軸 0.6 m 以上、深さ 0.4 m を測る。切り合い関係から S K 36・38 に先行する。土師器の坏・小皿・甕、黒色土器 A・B 類の坏、須恵器の甕などが出土した。

S K 38 (第 13 図)

調査区北部で検出した土坑であり、西側は調査区外へ延びる。平面形は円形を呈する。長軸 2.0 m、短軸 1.1 m 以上、深さは 0.2 m を測る。切り合い関係から S K 37 に先行する。土師器の坏・小皿・甕・須恵器の坏・甕、白磁碗、瓦器碗などの他に弥生土器の甕も出土した。

S K 45 (第 14 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形は不整円形を呈する。長軸 2.2 m、短軸 1.9 m、深さ 0.4 m を測る。土師器の坏・小皿・甕、須恵器の蓋・坏、瓦器碗などの他に縄文土器の細片や弥生土器の甕なども出土した。

S K 50 (第 15 図)

調査区北端部で検出した土坑であり、北側は調査区外へ延びる。長軸 1.7 m、短軸 0.9 m 以上、深さ 0.1 ~ 0.3 m を測る。底面に穿孔のある弥生土器の甕や丹塗土器が出土しており、祭祀に用いた可能性がある。また土師器の細片なども出土しているが、後世の遺構からの混入とみられる。

土壙墓

S T 8 (第 16 図)

調査区中央部で検出した土壙墓である。主軸方位は N -37.2° - E である。平面形は長方形である。長軸 1.4 m、短軸 1.0 m を測る。北部に段を有し、深さ 0.15 m を測る。下段までの深さは 0.5 m であり、底面はフラットである。S T 14・77 に後出する。遺物は出土していない。

S T 34 (第 17 図)

調査区中央部で検出した土壙墓であり、西側は調査区外へ延びる。主軸方位は N -87.5° - E である。二段掘りの土壙で、上段の規模は長軸 0.5 m 以上、短軸 1.0 m 以上、深さ 0.16 m を測る。上段の東側に 2 枚の板石が立っている。下段の規模は長軸 0.4 m、短軸 0.3 m を測る。下段までの深さは 0.2 m であり、底面はフラットである。遺物は出土していない。

S T 77 (第 18 図)

調査区中央部で検出した土壙墓である。主軸方位は N -93.5° - E である。平面形は丸みを帯びた長方形である。二段掘りの土壙で、上段の規模は、長軸 1.8 m 以上、短軸 1.3 m 以上、深さ 0.16 m を測る。下段の規模は、長軸 1.3 m、短軸 0.6 m、上段から下段までの深さは 0.4 m を測る。下段の平面形は北東側にせり出す長方形である。S T 8、S T 16 に先行する。遺物は出土していない。

石棺墓

S T 14 (第 19・20 図)

調査区中央部で検出した石棺墓である。主軸方位は N -5.3° -W である。蓋石は 4 石残存し、石材の重なり状況から、最初に北から 2 枚目の石を置き、次に北から 1 枚目の石を置いたとみられる。南側へは、南から 2 枚目の石を置いた後に南から 1 枚目の石を置いたとみられる。南北小口に各 1

枚、東西側壁に各3枚の板石を立て石棺とする。内法で主軸長1.2 m、小口幅は北端で0.44 m、南端で0.41 mを測る。掘方の平面形は南西部にややせり出す隅丸長方形である。掘方は長軸1.9 m、短軸1.3 m、深さ0.3 mを測る。切り合い関係からST 8に先行する。遺物は出土していない。

石蓋木棺墓

ST 5 (第21図)

調査区中央部で検出した石蓋木棺墓である。主軸方位はN -85.6° - Eである。蓋石は西側に3石残存しているが、先後関係は分からなかった。北側壁と南側壁に幅6～8 cmの板を立てた痕跡があり、木棺墓とみられる。なお、小口側には同様の痕跡は確認できなかった。内法で主軸長1.7 m、小口幅は東端で0.43 m、西端で0.4 mを測る。東へ7 cmのところ、褐色シルトが充填した掘り込みがあり、深さ14 cmを測る。底面は東から0.7 mまでは深さ0.1 mでフラットであり、そこから西へ緩やかに傾斜し、最大で28 cmを測る。掘方の平面形は隅丸長方形であり、長軸1.7 m、短軸0.7 mを測る。東から0.35 mのところ赤色顔料を検出し、人骨も一部出土したが、細片のため部位は特定できなかった。弥生土器の甕の細片が出土した。

木棺墓

ST 16 (第22図)

調査区中央で検出した木棺墓である。主軸方位はN -6.0° - Wである。土層の観察の結果、木棺墓であると判断した。木棺内法の規模は、長軸1.5 m、短軸38 cmを測る。掘方は隅丸長方形で、東側に深さ30 cmの段を有する。下段までの深さは18 cmである。上段部分が裏込めとみられ、上段底面に3枚の板石を平置きしている状態を確認した。ST 77に後出する。裏込めから弥生土器の甕の細片が出土している。棺内部からは石鏃の未製品が出土した。

甕棺墓

ST 1 (第23図)

調査区中央で検出した甕棺墓である。上甕は口縁が打ち欠かれており、そこに下甕が入れ子式に挿入されている。接合部に目張粘土を施す。墓壙の平面形は長円形で、長軸2.7 m、短軸1.3 m、深さ0.52 mを測る。北側にステップを有し、南側へ緩やかに深くなる。主軸方位はN -35° - W、埋置角は36°である。ST 15に先行し、ST 40に後出する。棺内から天河石製の丸玉が出土した。また、棺内の埋土中から土師器の坏や白磁碗の細片も出土しているが、後世の混入とみられる。

ST 2 (第24図)

調査区中央で検出した甕棺墓である。上甕は後世の削平によって破壊されていた。墓壙の平面形は不整円形で、長軸1.4 m、短軸1.3 m、深さ0.57 mを測る。主軸方位はN -88° - E、埋置角52°である。棺内から土師器の坏・甕、須恵器の甕、石鍋などが出土しており、後世の混入とみられる。

ST 15 (第25図)

調査区中央部で検出した甕棺墓である。上甕と下甕の口縁部は後世の削平によって破壊されていた。墓壙の平面形は不整円形で、長軸1.7 m、短軸1.2 m、深さ0.54 mを測る。西側にステップ

を有し、底面に向かって緩やかに傾斜する。底面はほぼフラットである。主軸方位はN -77.8° - E、埋置角 41°である。S T 2に後出する。赤色顔料が出土している。また、弥生土器の甕、土師器の坏、須恵器の甕、瓦器碗などが出土しており、後世の混入とみられる。

S T 25 (第 26 図)

調査区中央部で検出した石蓋甕棺墓である。石蓋は動いていないとみられるが、下甕の口縁部は後世の削平により一部破壊されていた。墓壙の平面形は不整円形で、長軸 2.0 m、短軸 1.7 m、深さ 0.95 mを測る。西側に 3 段、東側に 1 段のステップを有する。西壁はステップから徐々に傾斜をもって底面に至るが、東壁はやや掘りこまれ袋状を呈する。主軸方位はN -74.8° - E、埋置角は 42°である。切り合い関係からS K 31に先行する。棺内から管玉やガラス製勾玉、赤色顔料、人骨の一部が出土した。また、棺内から縄文土器の鉢、弥生土器の甕、土師器の坏、黒色土器 A 類の細片、須恵器の甕、白磁碗、青磁碗、羽口、鉄滓、大量の巨礫なども出土しており、中世の段階でこれらの遺物を投棄したと推測される。

S T 26 (第 27・28 図)

調査区中央部で検出した甕棺墓であり、掘方の一部が北側へ延びる。墓壙の平面形は隅丸長方形で、長軸 1.7 m、短軸 1.3 m、深さ 1.2 mを測る。北側にステップを有する。ステップ内の深さは、北側 16cm、南側 52cm と北から南側へ傾斜する。ステップから底面まではほぼ垂直である。南壁は袋状を呈する。主軸方位はN -21.6° - E、埋置角は 36°である。接合部に目張粘土を施す。棺内からほぼ全身の人骨が出土した。また、頭蓋骨の右頬骨付近に赤色顔料が付着していた。

S T 30 (第 29 図)

調査区中央部で検出した石蓋甕棺墓である。2 枚の板石をもって蓋とする。墓壙の平面形は楕円形で、長軸 1.9 m、短軸 1.4 m、深さ 0.87 mを測る。北側に 3 段のステップを有する。1・2 段目は緩やかに傾斜するが、3 段目と底面までは角度をもって傾斜する。南壁は袋状を呈する。石蓋と下甕の空隙に目張粘土を施す。主軸方位はN -19.4° - E、埋置角は 30°である。棺内から人骨が出土した。

S T 40 (第 30 図)

調査区中央部で検出した甕棺墓である。蓋の一部は土圧により下甕の埋土内へ落ち込んでいた。また下甕の胴部下半についても土圧により歪んでいる。墓壙の平面形は隅丸長方形で、長軸 3.4 m、短軸 2.3 m、深さ 1.7 mを測る。東側に 2 段のステップを有する。1 段目の深さは 0.48 mでほぼフラットであるが、2 段目は 0.38 m～0.79 mと西側へ向かって傾斜する。2 段目から底面まではやや角度をもって傾斜する。西側の壁は袋状を呈する。接合部に目張粘土を施す。主軸方位はN -99.9° -W、埋置角は 46°である。S T 1に先行する。棺内から、硬玉製の玉と素環頭刀子、石鏃が出土した。

S T 120 (第 31 図)

調査区北部で検出した甕棺墓であり、小児棺とみられる。上甕の一部は後世の削平によって破壊

されていた。墓壙の平面形は楕円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.42 mを測る。西側に 2 段のステップを有し、底面まで緩やかに傾斜する。東壁は袋状を呈する。主軸方向は N -69.2° - E、埋置角は 51°である。遺物は出土していない。

S T 126 (第 32 図)

調査区北部で検出した甕棺墓であり、小児棺とみられる。墓壙の平面形は楕円形で、長軸 0.5 m、短軸 0.4 m、深さ 0.51 mを測る。東側にステップを有し、ステップから底面までは角度をもって傾斜する。西壁は袋状を呈する。主軸方向は N -60.3° - E、埋置角は 19°である。接合部に目張粘土を施す。切り合い関係から S K 45 に先行する。遺物は出土していない。

2. 出土遺物

今回の調査では、パンコンテナー 40 箱分の遺物が出土した。現在整理作業中であるため、正式報告において詳説したい。

IV. 総括

今回の調査では、縄文時代の集落、弥生時代の墓域、中世の集落の一部を確認することができた。調査地は高良山から西へ派生した段丘上に立地するが、北側は段丘崖となっているため、二本木遺跡のほぼ北東端にあたとみられる。以下、時期別に概要を述べるが、詳細な時期については整理作業の結果変更する可能性がある。

縄文時代の遺構は、S I 132 が挙げられる。第 24・26・30 次調査では縄文土器が出土しているが、明確な遺構は検出されていないため、二本木遺跡では初めての例といえる。

弥生時代の遺構は溝 2 条、土坑 1 基、土壙墓 3 基、石棺墓 1 基、木棺墓 2 基、甕棺墓 9 基である。中期後半に属する幅 5 m の溝が第 12 次調査地から第 31 次調査地にかけて約 140 m 分検出されており、その溝から西側で竪穴住居や土坑が確認されている。墓域は、これまで第 16 次調査で検出した中期の甕棺墓 3 基のみであったが、今回の調査でさらに東側へ広がることが分かった。台地の北端に墓域、その南側に集落が展開したと想定できる。また、今回の調査で検出した墳墓については、赤色顔料が認められるものや副葬品をもつものがあり、久留米市中部における弥生時代中期後半から古墳時代初頭の階層社会を考えるうえで重要な資料といえる。

中世の遺構は土坑 9 基が該当し、10 世紀後半から 12 世紀代に属するとみられる。二本木遺跡の南西側に所在する IV 期政庁（横道遺跡）は 11 世紀後半から 12 世紀後半まで存続したことが判明している。二本木遺跡で検出される同時期の遺構については政庁に勤める官人の居住に伴うものとされており、今回の調査で検出した土坑もその一角と考えられる。なお、弥生時代の甕棺墓の破壊や甕棺墓の埋土中からの輸入陶磁器の出土は、中世段階の当地の造成を示すものと考えられる。特に S T 25 に関しては、蓋石が巨大だったため動かせず、破壊した下甕の空間を埋めるかのように、輸入陶磁器などととも多量の巨礫を投棄しているようである。



第4図 調査区全景（南上空から）



第5図 S D 3完掘状況（北から）



第6図 S D 4完掘状況（北から）



第7図 S K 6完掘状況（北から）



第8図 S K 7完掘状況（北から）



第9図 S K 32 完掘状況 (西から)



第10図 S K 33 完掘状況 (北から)



第11図 S K 36 完掘状況 (北から)



第12図 S K 37 完掘状況 (北から)



第13図 S K 38 完掘状況 (東から)



第14図 S K 45 完掘状況 (北から)



第15図 S K 50 遺物出土状況 (東から)



第16図 S T 8 完掘状況 (西から)



第17図 S T 34 石材出土状況（北から）



第18図 S T 77 完掘状況（北から）



第19図 S T 14 検出状況（北から）



第20図 S T 14 石蓋除去状況（北から）



第21図 S T 5 検出状況（南から）



第22図 S T 16 石材出土状況（南から）



第23図 S T 1 出土状況（南東から）



第24図 S T 2 出土状況（東から）



第25図 ST 15 出土状況 (東から)



第26図 ST 25 出土状況 (東から)



第27図 ST 26 出土状況 (南から)



第28図 ST 26 人骨出土状況 (南から)



第29図 ST 30 出土状況 (東から)



第30図 ST 40 出土状況 (西から)



第31図 ST 120 出土状況 (東から)



第32図 ST 126 出土状況 (西から)

報告書抄録

ふりがな	にほんぎいせき —だい32じはつくつちようさがいようほうこく—
書名	二本木遺跡 —第32次発掘調査概要報告—
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第453集
編著者名	長谷川 桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9714 Email: bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2024(令和6)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
二本木遺跡 第32次調査	福岡県久留米市御井町字 旗崎1164番1、1168 番4、1168番5	40203	030284	33° 18' 40"	130° 33' 21"	20230206 ～ 20230331	299m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
二本木遺跡 第32次調査	集落 墓地	縄文 弥生 中世	竪穴住居 溝 土坑 土壇墓 石棺墓 木棺墓 甕棺墓 土坑	1基 2条 1基 3基 1基 2基 9基 9基	縄文土器、弥生土器、ガラス勾玉、管玉、素環頭刀子、硬玉製玉、天河石製丸玉、土師器、須恵器、輸入陶磁器、鉄滓	縄文時代・中世の集落と弥生時代の墓域を確認した。

要約

調査地は高良山から西に派生する中位段丘上に立地し、段丘の北端にあたる。縄文時代の竪穴住居は二本木遺跡では初めての検出例である。弥生時代の墓域は、第16次調査の甕棺墓の検出と併せて台地の北端に展開し、集落はその南側に広がるようである。今回検出した墓域は、赤色顔料が認められるものや副葬品をもつものなどがあり、その階層性が注目される。中世段階の遺構は、IV期政庁に勤める官人層の居住域の一角とみられ、その造成を示すかのように、弥生時代の破壊された甕棺墓の中から輸入陶磁器などが出土した。

土木工事の届出日	令和4年11月8日	遺物の発見通知日	令和5年4月4日 (4文財第3576号)
----------	-----------	----------	-------------------------

二本木遺跡 —第32次発掘調査概要報告— 久留米市文化財調査報告書 第453集 令和6(2024)年3月31日 発行 久留米市教育委員会 編集 久留米市市民文化部文化財保護課 印刷 香和印刷株式会社 久留米市津福本町2320-15
--